

小学部保護者学習会にご参加ありがとうございました。

「私が進んできた道、これから進む道」というテーマで、大西啓人先生(小学部講師)にお話していただきました。お話の内容を紹介します。

私の家族は両親と兄と私の4人です。私以外の家族は3人も聴者です。ひよこ組の時から高等部3年生まで奈良ろう学校に通いました。卒業後は、ろう学校の英語の先生になりたいとて佛教大学へ進学しました。さらにろう児童生徒のための英語の指導法や教材研究のためにギャローデット大学(アメリカにあるろう者の大学)大学院へ進みました。まず、私の生い立ちからお話します。

幼稚部の時は、現在中学部にいる吉本先生が担任でした。吉本先生と手話でたくさんお話がたくていつもついて歩いていました。中でも印象に残っていることは、吉本先生の手話での絵本の読み聞かせで、今でも鮮明に覚えています。また、家族全員が手話を使えるので、家でテレビを見たり本を読んだりしたときに、私がわからないと思ったことはすぐに家族に聞くことができました。特に兄は手話を使いながらよく一緒に遊んでくれました。私はとうとう、やんちゃでいたずら好きな男の子でした。やってはいけない悪いこともしてしまったこともあります。そのたびに、「もしあなたが同じことをされたらどう思うの」と担任の先生や母に叱られました。それでも私は「自分がいつも正しい」という思いこみが強く、私が相手の気持ちをよく考えて納得して理解するまで、担任の先生や母が根気強く向き合ってくれたことを今は感謝しています。



小学部に入って、つまづいていたことは日本語学習でした。国語では、手話ビデオを使って手話で文章内容・意味をつかんで実際に書いてある日本語に結びつけていく方法で学習しました。家庭でも母に絵本や小説を手話で読んでもらって内容を理解してから、自分で文章を読んでいましたのでこの方法がわかりやすかったのだらうと思います。3,4年生の頃は作文を行事や校外学習のたびに書いていました。書いては先生に訂正されて書き直すということの繰り返しがあり、苦手意識がどんどん増していく頃でした。当時は悔しくてつらかったのですが、その経験が自分の今の日本語力にも結びついているのではないかと思います。今となっては厳しく指導してくれた先生に感謝しています。日本語を理解する中で特に難しかったのは、抽象的な概念でした。例えば「昨日」「今日」「明日」といった時間を表す言葉がありますが、今日、教えてもらった「今日」が明日になると「昨日」となり、混乱し、理解するまで時間がかかっていたことを今でも覚えています。母と、実際に「昨日」「今日」「明日」が視覚的にわかるパネルのようなものをカレンダーに当てて、「〇日は今日?明日?」と確認し、次の日になるとそのパネルを一日ずらしていくということを繰り返し、少しずつ「今日」が「昨日」になる理由を理解してきました。自分の経験が言葉につながることはよくあると思います。私の場合、その方法だと理解しやすかったのです。さらに学校だけではなく、ろう幼児児童が集う場を作る近畿中心に活動している関西デフブリースクール「しゅわっち」に幼稚部の頃から通っていました。そこでは、自分にとって大きな影響を受けました。「しゅわっち」は全国からさまざまなろうの友達が集まっており、日本手話という手話言語を使うコミュニティだから、私は気楽にコミュ

ニケーションをとることができ、人脈や視野を広げるだけでなく、言語力の向上にもつながっていったと思います。つまり、私にとってろう学校は日本語や常識、知識を学ぶ場所で、「しゅわっち」はろうの同級生と気楽におしゃべりしながら過ごせる場所で、第一言語の獲得・向上、アイデンティティ形成、ろう者の生き方などを学ぶことができる場所でもありました。また、「しゅわっち」は成人ろう者と関わる場なので、家族にとっても自分の息子の将来像を思い描くことができたようです。

中学部ではいい先生との出会いがあり、英語を楽しく学ぶことができました。現在英語教師になれたのもこの出会いがあったおかげです。中学部は、進路について親とよく話し合い私にとってのターニングポイントでした。当時の私は自分がやりたいことがまだ見つかっておらず、また情報が足りなかったため先輩たちが進んだ進路にそのまま自分も。とっていました。しかし、親から、「高卒で就職することも正しい選択肢だけれど、大学で専門性を深めることで高卒よりはるかに選択肢の幅が広がると、自分がやりたいことを選べるようになるんじゃないの」と言われ、大学進学を決めました。



高等部では、大学進学を決めたのはいいけれど、どこの大学に行くか悩んでいました。中学部での経験から、英語の教師になるための資格が取れる場所、情報保障がある場所と少しずつフィルターをかけていきました。オープンキャンパスに行き、志望大学を絞り、高2の時点で行きたい大学を決めることができました。高3の冬、受験が終わる頃に「近畿ろう学生懇談会」という近畿圏の大学に在籍しているろう学生が集まる団体があることを知り、参加

しました。そこは、大学での情報保障の問題や困りごとの相談や議論がなされる場でとても意義のある場所だったので、大学生になった後も入会し、参加するようになりました。



大学では、自分が英語教師になり、中学部で楽しく学んだ経験を将来の子どもたちにもしてほしいという思いから、英語教員の免許取得を目指して勉学を続けていました。しかし、4回生に進級した頃にまだまだ自分には経験や知識が不足していると感じ、ギャロデット大学大学院に留学し、ろう教育を専攻することにしました。ギャロデット大学では、国籍が異なる学生が集まるため、みんな使う言語も文化も違い、多様性が尊重され「違って当たり前」という世界でした。今まで当たり前だ

と思っていたことや自分の言動に対する考え方や視野が大きく広がりました。ギャロデット大学院の仲間は、自分の考え方をしっかり持って発言することができている中、私は「あなたは どう思う？」と聞かれても、答えられなくて、経験の少なさを実感しました。刺激の大きいギャロデット大学院を卒業し、自分でも大きく成長できたと実感でき、英語教師になる自信も持てるようになりました。

これまでが私の生い立ちとなります。自分の歩んできた道を振り返って思うことは、「人とのつながりをもつ」「きちんとコミュニケーションをする」が最も大切であるということです。特に幼稚部の頃から通っていた「しゅわっち」で、成人ろう者のロールモデルと親子で出会っていたことが、自分のアイデンティティを確立させることや、親が成人ろう者の生き方をイメージ



できるようになることにつながったと思います。人脈を広げることで新たな発見や刺激、有益な情報を得ることが

できました。人とのつながりでいうと、ろう学校の同級生である重複の友達との関わりも私にとって重要でした。その友達はいつも予定が変わったり、ものの置き場所が違ったりするとイライラしてしまう特性をもっていました。けれど、私はその友達との出会いで「人との違いは個性の違いである。」と意識できるようになったのです。最初はもちろん自分と違うことで違和感や不思議に思うこともありましたが、その友達から話を聞いたり、その友達について先生と話したりすることでその人自身にとって大切なこととは何かと分かるようになってきました。この経験は、人を憶測で判断するのではなくきちんと話を聞き、物事を判断するということを学ぶきっかけにもなりました。そのように人とのつながりは様々なことにつながっていると思います。コミュニケーションをすることで様々な人の価値観を聞く、様々なことを知る機会が増えると思います。また、ろうである自分をポジティブに捉える(目で情報を得ることが得意という風に考える等)ことや自分のアイデンティティが形成されるためにもコミュニケーションが大切であると思います。そのために手話で何でも視覚的に「分かる」経験しておくことや、大人や同級生など様々な人と話して人の気持ちを考えることを、子どもの時からコミュニケーションをしながら考えさせる必要があると皆さんに伝えたいです。目に見えるもので言葉を覚えることは比較的簡単ですが目に見えない抽象的なことや人の気持ちを考えることは、経験していないととても難しいのです。そのときも親が一方向的に話すのではなく、子どもの言いたいことをうまく引き出して子どもに考えさせてたくさん話をさせることが大切ではないかと思います。特に子どもにとって家庭とのコミュニケーションが一番影響を受けることだと考えています。私の家庭では小さい時から家族と手話で話をしていました。父は小さい時話す機会が少なかったですが、手話を覚えてくれたおかげで今でも酒を飲みながら会話を楽めています。兄は年に1~2回ほどしか会う機会がないのですが、小さい時からの積み重ねがあったおかげで久しぶりに会っても普通に手話で話すことができます。母に至っては手話通訳として活動できるほどの手話力があるので、世間話だけでなく、仕事、一般社会、ろう者を取り巻く環境などをテーマに議論することもあります。

ここまでの生き立ちが長くなってしまいましたが、これからの私の夢は、ろう学校の子どもたちにもっと英語を好きになってもらうことです。そして子どもたちにどんどん世界に羽ばたいてほしいと思います。私はそのためのお手伝いができたらいいなと思っています。



(質問タイム)

Q:聴者の家族は手話をどうやって身につけた？

A:母にとって、手話力を向上するために一番早い方法が私とのコミュニケーションだと考えていたようです。そのために、私とのコミュニケーションはきちんと向き合ってくれていました。また、コミュニケーションの質を上げるために手話の学習会を自分たちで立ち上げたと聞いています。ろうの保護者の方やろうの先生の協力を得て、保護者仲間と放課後学習会をしていたようです。また、成人ろう者がいるコミュニティである「しゅわっち」に私や兄を連れていってくれていたのですが、そこでも手話を身につけていく機会がありました。今は、手話通訳をしています。父は母ほど流暢に話せませんが、小さい時から家族の団らんではできる限り手話を使ってくれました。兄は私と歳が近いのでいつも一緒に遊んでくれたり、「しゅわっち」にも小さい時から一緒に参加したりしていましたので、小さい時から手話を使ったり、見たりする機会があったため、自然に身につけていったと思います。



Q:「しゅわっち」について

A:全国からろうの子どもが集まる場所で、最近開催した「しゅわっち運動会」では子どもだけで100人近く集まりました。全国から集まると説明しましたが、活動拠点は近畿なので比較的参加しやすい近畿の子どもたちが多いですね。「しゅわっち」は今でも活動を続けており、対面企画はコロナの関係で減ってしまいましたが、少しずつ回数を増やしていこうと頑張っているところです。しゅわっちスタッフはみんな日本手話を使うろう者で、私もそのスタッフの一人です♪

Q:将来の夢はいつどのように決めた？

A:小学生の時は野球選手になりたいと思っていましたが、中学生の頃から野球選手は現実的ではないと諦めた記憶があります。だんだんと年齢が上がるにつれて自分のしたいことが明確になって、いろんな人と自分の進路についてもよく話し合う機会も作りました。私の場合、中学部や高等部で自分がやりたい職業と考えたときに教師という選択になりましたが、大学に入ってからやりたいことを探す。という選択も大いにあると思っています。



Q:英語の勉強法は？

A:文法は日本手話で理解できる環境があれば良かったのですが、私の場合は日本語による説明で学んできました。高校卒業時、英語力がすば抜けているわけではなく、平均的だったと思います。ろう児童生徒にとって英語を学べる場所は学校以外ほとんどありません。私も学校以外は独学で学んでいました。高3は大学受験に向けて、独学では限界だと感じ、一般個別塾で英語を学んでいました。

担当の先生とは文法プリントで問題を解きながら、間違えたところを筆談で教えてくれる方法でした。理解できる場所もありましたが、つまづいていたところもあり、苦労しました。

アメリカでは、「アメリカ手話」という日本手話と同じカテゴリーに入る手話言語があります。最初はアメリカ手話を習得するのに時間がかかり

ましたが、習得した後はアメリカ手話で理解し、英語で文書を残す。という一連の流れを繰り返していくことでみるみる英語力がついていったように感じました。もちろんアメリカ手話を覚えた方がいいとは言いません。この経験から思ったことは私の場合、「視覚言語である手話で理解してから英語を学ぶ」というやり方が自分に合っていると思えたのです。この時から子どもに英語を教えるとき、視覚から英語を学ぶことを大切にしていこうと思いました。



「手話を力にいろんな人とつながり、視野を広めていったと」いうお話が印象的でした。早速、この講演会がきっかけで「手話サロン」では、活発な情報交換ができたというような感想もいただきました。

もし大西先生のお話への感想や質問があれば、担任の先生にお渡しください。また、来年度の保護者学習会の内容についてもご希望がありましたらお知らせください。

